

42066

教科書文庫

4

810

41-1908

20000
66905

Kodak Gray Scale



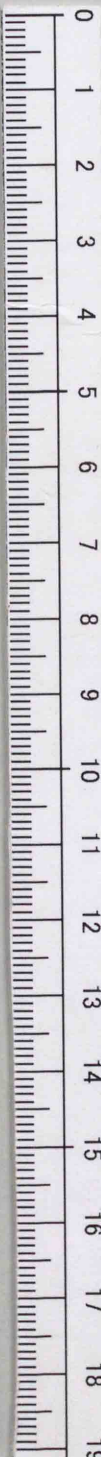
© Kodak, 2007. TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007. TM: Kodak



4a
810
明4



資料室



新國語教本卷六目次

- 一 尊王論の曙光
- 二 白石のおひたち
- 三 板倉重宗
- 四 專一なれ
- 五 登蓮法師
- 六 大田道灌
- 七 聯合艦隊解散告別ノ辭
- 八 國旗と軍旗
- 九 遊就館の古武器

一 六 三 六 二 四 元 三

目次

40
810
P491

文部省檢定 明治四十年十二月廿六日
明治四十年十二月廿六日 中學校國語科用

文學博士 藤岡佶太郎編

新國語教本

東京 開成館出版

(卷六)

一〇	愛郷心	三七
一一	イギリス人とフランス人	四〇
一二	高田屋嘉兵衛	四三
一三	大阪	四七
一四	木曾の奇勝	五二
一五	秋の歌	五五
一六	圓山應舉	六〇
一七	松	六三
一八	鎮守の森	六七
一九	逗子の冬	七〇
二〇	宇宙の浩大	七三

(卷六)

二一	小話二則	八五
二二	鳥居元忠	八八
二三	古今傳授	九〇
二四	古羅馬氣質	九三
二五	山岡鐵太郎	九七
二六	日蓮上人	一〇一
二七	田舎と偉人	一〇五
二八	都人の手紙	一〇九
二九	農夫の歌	一一三
三〇	農業は健康を養ふ	一一七

新體國語教本 卷六

文學博士 藤岡作太郎 編

一 尊王論の曙光

明治の維新は王政の復古なり、王政の復古は古代の研
究に基づく。幕政の抑壓を屑しとせず、士氣の沈滯を慨
くもの、古史を繙きてそらろに王朝の盛代を懐へり。幕
末の世、志士が崛起して尊王論を唱へ、遂に幕府を瓦解
せしめたるは、その初を尋ねれば、これらの學者が研鑽
の影響を受けたるなり。

屑しとせず

研鑽

超え。素しし

德川光圀は家康の孫にして、水戸侯頼房の第三子なり。兄を超えて家を嗣ぎたれども、常にその昆弟の分を素ししに安んぜず、史記の伯夷傳を讀みて益、この感あり、深く歴史の必要を覺れりと傳ふ。修史は實に光圀の素志なり、遂に小石川の邸内に彰考館を設け、著名の學者を聘し、御府の祕書を



德川光圀

り、深く歴史の必要を覺れりと傳ふ。修史は實に光圀の素志なり、遂に小石川の邸内に彰考館を設け、著名の學者を聘し、御府の祕書を

ざりしが。

纂輯

借り、國內の逸書を求め、儒臣をして古代の歴史を編述せしむ。初はこれを史稿といひ、朝廷を憚りて名を命ぜざりしが、子孫相繼ぎてその補修に當り、また勅許を得て大日本史と稱せり。

大義名分
……が……なり
しこと

光圀の史臣をして纂輯に従はしむるや、自らこれを監督す。その意見によりて古來の説を改定したるもの三箇條あり、神功皇后を皇妃傳に收め、弘文天皇を本紀に掲げ、神器の所在を徵證として南朝を正統に立てたること、これなり。皇統の正閏を明かにし、大義名分を重んずるが、その本意なりしこと、以て知るべし。光圀深く皇室を畏敬し、毎歲元旦には必ずまづ西に向つて宮闕を

空しからず
が……なりた
るコトも

遙拜したりといふ。また正成の遺烈を慕ひ、碑を湊川に
建てて、嗚呼忠臣楠子之墓と題せり。義公の諡空しから
ず。後世、水戸が尊王論の一方の中心となりたるも、故あ
るかな。

卓拔



荷 田 春 滿

光圀また難波の僧契沖に託
して、萬葉集を註釋せしめた
り。契沖深く心を古代の典籍
に潛め、識見も極めて卓拔な
りしが、その從事せるところ
はなほ古文辭の學に止りぬ。
上世の制度習俗を究めて、國

唱道

民の特性、固有の大道を闡明したるは、ついで京に出て
たる荷田春滿あつまるにして、國學は即ちその唱道によりて立
ちたるなり。

因循
獨得

春滿は伏見稻荷の祠官なりき。幼より復古の學に志し、
當時、殿上家が門閥に據り、因循に流るゝを慨き、師とす
るところなくして獨得の見を立つ。嘗て詠じて曰く、
踏み分けよ、倭にはあらぬから鳥の
跡を見るのみ人の道かは。

道かは

れ。こ。そ。は。著。す。め。

抱負

又曰く、書を著すも道の爲、世の爲、人の爲にこそは著す
めれ」と。その國史律令を學び、學問の消長、道義の興廢を
説きたるもの、一にこの抱負を實現し、淳良なる上古の

儀表

帷を……垂る

風を儀表として現代の弊習を矯めんとしたるものに外ならず。賀茂眞淵が帷を江戸に垂るゝに及びて、その學海内を風靡し、博洽なる本居宣長は先哲の説を完成し、氣慨ある平田篤胤は皇國の大道を提げて、天下に宣傳す。尊王愛國の念はかくの如くして鼓吹せられたるものにして、維新の際における勤王家には國學者も多かりしなり。

三期

二 白石のおひたち

記しし

上野物語とて、寛永寺の花見に人の群れ來る事どもを記しし草紙ありけり。吾三歳なりし春の頃ふやあるべ

れはせし

寫しし

題せし

き、火燧に足をさして腹ばひ居て、その草紙を透き寫したり。母にてれはせし人の見給ひ、十の中一二をまことの文字もあるを、こが父に見せまゐらせられしを、父の友なる人の來り見しより、人々も聞き傳へて、その寫しし物どもを取り傳ふることおなりけり。吾十六七歳の時、上總の國お行きしに、かしこふてその頃寫しし物を見たりき。又その頃屏風にこが名を題せしに、二字はその體をなしたるもの、後までありしが、火に焼け失せたりければ、今はその頃の物はこが許には残らず。この後、常の戲に筆執りて物書くことのみしければ、れのづゝら文字をも見知りたれど、師友とすべき人な

戸部は久留里藩
主士屋利直、そ
の官が民部少輔
なる故にいふ

講せしめらる。

……こともな
く、……こと
などもありし
を、……とい
ひき

奇特

聞かせし

教へられ

かりしりば、たゞ往來物の類をど読み習ふのみありき。
戸部の家人に富田とて、生國は加賀國の人と聞えしが、
太平記の評判といふ事を傳へて、その事を講ずるあり。
夜々にわが父あど寄り合ひつゝ、これを講せしめらる。
吾四五歳の時に、常にその座に侍りてこれを聴くに、夜
いさく更けぬれど終にその座を去りしこともなく、講
畢りぬればその義を請ひ問ふことあどもありしを、人
人奇特のことありといひき。
六歳の夏の頃、上松といひし人のいさゝる文字などあ
りしが、七言絶句の詩一首教へて、その意を解き聞かせ
しに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、

學ばしめらる。

こゝ生まれつ
きたらめ

心得られ

人にも講じ聞かせたりき。この兒文才あり、いかにも師
を選びて學ばしめらるべし。など、かの人もいひしかど、
頑なる昔人どちのいひしは、昔より言ひ傳へし事あり、



石

新 難しといふなり。この兒
利根こそ生まれ付きた
白 利根こそ生まれ付きた
石 利根こそ生まれ付きた
程も計り難く、家富めり
とも見えねば、黄金の事
も心得られず。など言ひ

誇らせ給ひ
たくこそあれ
教へしめられ

復(又、亦)

合へり。とが父も「汝、戸部の御いつくしみに由りて、常に御側を離れまらせねば、學に入れ師に従はしめん事も叶ふべからず。されど幼きより物書くことをば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて物をば書き習せしめたくこそあれ」とて、とが八歳の秋、戸部の上總國に行き給ひしあとにて、手習ふことを教へしめられき。

その冬の十二月半ばに、戸部歸り給ひしかば、常に傍に侍ふこと元の如し。あけの年の秋、復、國に行き給ひしあとにて、課を立て、日の中には行草の字三千字、夜に入りて一千字を限りて書き出すべしと、命ぜられたり。冬に

課：満たざる
課を満てざる

附けられ

置かせ

復
課をも満てたり、も満ちたり

至りては、課未だ満たざるに日暮れんとすること度々にて、西むきなる竹縁の上に机を持ち出でて、書き終へたることもあり。又夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、吾に附けられし者と竊に計りて、水二桶づつかの竹縁に汲み置かせ、痛く睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄ててまづ一桶の水をかぶりて、衣うち着て習ふには、はじめ冷りあるに目覺むる心地すれど、しばらく程経ぬれば、身暖あになりて、またく、睡くなりぬれば、復水をかぶること前の如くす。再び水をかぶりぬる程には、大やうは課をも満てたりき。これとが九歳の秋冬の間の事なり。

(新井白石)

三 板倉重宗

重宗は勝重の子
京都所司代とな
る

する。

聽(聞)

ことわらん

重宗職に任じて後、日々決斷所に出づる毎に、まづ西面の廊下にて遙に拜する事あり。決斷所には茶臼一つをすゑ置き、明障子を引きたててその内に坐し、手づから茶ひきながら訴を聽き判つ。人みなこの事どもを不審しあへり。
これはいかなる故ぞと問ふ人ありしに、答へて曰く、まづ決斷所に出づる時に、西面の廊下にて拜する事は、所願ありて愛宕の神を拜するなり。その所願といふは、今日重宗が訴をことわらん、心に及ばん程はわたくし

あらじ(あらす)

動く。静かな
る。とを

事あらじ、若し過ちてわたくし事あらんには、たち所に命を召され候へ」と、日毎に祈誓するにて候ふ。
「また訴を判つ事の明かならぬは、わが心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ。よき人はおのづから動ぜざらんやうあるべけれど、重宗それまでの事は叶ひ難し。たゞわが心の動く。と静かなる。とを試みるには、茶をひきて知る。心定まりて静かなる時は、手もそれに應じて臼のめぐる事平にして、きしられて落つる茶如何にもこまかなり。茶のこまかに落つる時に至りてわが心も動かずと知り、その後やうやくに訴を判つ。
「また明障子を隔てて訴を聽く事は、凡そ人の面貌をう

憎さげなると。
哀がましきと
あり
聞かれ

思はれ

ち見るに、憎さげなると、哀がましきとあり、誠しきあり、かたましきあり、その品多くしていくらといふ數を知らず。見る所の誠しき人の言ふ事は誠と聞かれ、かたましと見ゆる人の爲す事は詐と見ゆ。又哀がましき人の訴は枉げられたる所あるよと思はれ、憎さげなる人の争は僻事ならんと覺ゆ。これらの類は、わが目に見る所に心の移されて、彼が言葉を出さぬ内には、わが心の中に、邪ならん、正しからん、曲りたらん、直からんと思ひ定むる程に、訴の辭を聽くに至りては、わが思ふ方に、その事を聽きなす事多し。訴の成るに及びては、哀がましきに憎むべきあり、憎さげなるに哀なるあり、誠しきに

(卷六)

人の心の知り
難きコトハ

さなきだに：
恐しがるべき
に

得いはで

所詮

見も見られも

偽りかたましきものある事、この類殊に多し。人の心の知り難き、容を以て定めん事叶ふべからず。いにしへ訴を聽くには、色を以て聽く事ありき、それは覆はるゝ所なき人の事なるべし。重宗が如きは、見る所に就きて、心覆はるゝ事多し。又さなきだに、訟の庭に臨んでは、恐しかるべきに、まして生殺を掌る人を見ては、まばゆくいぶせて、おのづから言ふべき事も得いはで、罪にも科にもあふ人あらんと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬには、若かじと思ひて、かくは座を隔つるにて候ふ。と答へきとなり。

(新井白石)

四 專一なれ

因果の理
たつき

あるもの子を法師になして、因果の理をもしり、説經などして、世にふるたつきともせよといひければ、教のまに説經師にならんさめに、まづ馬に乗りあらひけり。輿車もさぬ身の、導師に請ぜられん時、馬をど迎にれこせたらんに、桃尻にて落ちあんは心うりるべしと思ひけるなり。次に佛事ののち、酒をど勸むる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざやうく、境に入りければ、いよくよくしたく覺て嗜みける程に、説經

檀那
境に入り

落ちあん

年よりにけり

あらまし事

むねとあらまほし

ならふべきひまなくて年よりにけり。
この法師のにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若き程は、諸事まつけて、身をたて、道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらまゝ事ども心まはかけながら、世をのどかと思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事まのまぎれて、月日を送れば、ことごとくなす事あくるて、身は老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひやうに身をもさず、悔ゆれどもとりかへさるゝ齡ならねば、走りて坂をくさる輪の如く衰へゆく。
されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中

いづれあまざる

すてじ(すてず)

よいづれあまざると、よく思ひくらべて、第一のことを案じさどめ、その外は思ひすてて、一事を勵むべし。一日の中、一時の中も、あまこの事の來らんなり、少くも益のまさらん事を營み、その外をばうちすてて、大事を急ぐべきなり。何方をもすてじと心もとりもちて、一事も成るべからず。

(徒然草)

五 登蓮法師

一事を必ずなさんと思えば、他の事の敗るをもいたむべりらず、人の嘲をもはづべりらず。萬事にかへずして、一の大事なるべりらず。

ひじり(聖)

蓑笠やある

雨やみてこそ
マカラレヨ

うせなば(うせ
われは)

尋ねきゝてん
や

こそ... 覺ゆれ
... こそ... 覺ゆれ
侍るなる

人のあまざありける中にて、ある者ますほのすき、まそほのすきなどいふ事あり、渡邊の聖このことを傳へ知りとり。と語りけり。登蓮法師その座に侍りける。これを聞きて、雨のふりけるよ、蓑笠やある、かし給へ。かの薄の事ならひに、渡邊の聖のがり尋ねまうらん。といひけるを、あまりに物さがし、雨やみてこそ。と人のいひければ、無下の事をも仰せらるゝものか、人の命の雨のはれまをもまつものか。吾も死よ、聖もうせなば、尋ねきゝてんや。とて、走り出で行きつゝ、習ひ侍りよけりと、申し傳へさるこそ、ゆくありおさう覺ゆれ。敏きときは則ち功あり。とぞ論語といふ文よも侍るなる。

(徒然草)

薙髮

川越、岩槻共に
武藏國にあり

文明十八年は二
一四六年

六 大田道灌

大田持資、薙髮して道灌と稱す、關東管領上杉定正に仕へて、江戸城に居たり。勇敢にして武略あり、民を愛し、敵



大田道灌

を破り、主家をして東國に雄視せしむ。また築城の術に長じ、江戸、川越、岩槻等の城はその手に成れりといふ。文明十八年、定正讒を信じてこれを殺す、扇谷家の武威これ

若き女の……
……捧げた
れば

兼明親王の詠

なきぞ悲しき

押させん
視はせし

より衰へたり。

道灌はじめ文事に通ぜざりき。嘗て鷹狩に出でて雨に遭ひ、路傍の家に入りて蓑を求むるに、若き女の物をも言はず、垣根の山吹を手折りて捧げたれば、道灌佛然として「吾は花を求めず」とて歸れり。これを聞きて、ある人「それは『七重八重花は咲けども、山吹のみの一つたになきぞ悲しき』といふ古歌の意なるべし」と教へしかば、道灌いたく慚愧し、これより和歌に志して、遂に大名を博せりといふ。

定正嘗て上總の廳南を攻めんとして、海岸に出でたり。潮干の折を計りて、軍勢を押させんとて、斥候をして視

驅けさすと

僧曉月の詠

満干をぞ知る

素性法師の詠
淵やは騒ぐ
こそ……立て
渡せや

はせしが、夜半のこととて分明ならず。道灌「某物見仕るべし。」とて、馬を驅けさすと思ふ間もなく歸りて、「潮は干て候ふ、御すゝみあるべし。」といふ。如何にしてはや知りたる。」と問へば、「遠くなり近くなるみの濱干鳥、鳴く音に潮の満干をぞ知る。」と古歌にいへり、今千鳥の聲は遙に候ふ。」と答ふ。げにもとて定正の軍勢安々と干潟を通りぬ。又ある時、軍を返して利根川にかゝれることあり。これも闇の夜にて、暗さは暗し、如何せんと、皆々躊躇せるに、道灌指圖して、「そこひなき淵やは騒ぐ、山川の淺き瀨にこそあだ浪は立て。」といふなるに、唯瀨の音高き所を渡せや。」とて、無事に引上げたりといふ。

康正元年は二一
一五年

さこそ……を
しからめ

寛正元年は二一
二〇年
天皇は後土御門
天皇

天覽

軒端おぞ見る

康正元年、藤澤の役に、中村重顯敵一騎討ち取り、「この武士の振舞のやさしかりしに、いざ一首手向けられよ。」と道灌に勧めぬ。道灌とりあへず、その首に對うて、かゝる時さこそ命のをしからめ、かねてなき身と思ひ知らずば。寛正年中、上洛せしに、天皇武藏野の景色を勅問あり、道灌露れかぬ方もありけり、夕立の空よりひろき武藏野の原。と答へ奉りぬ。更に天覽に供せし歌、わか庵は松原つゞき、海近く、富士の高嶺を軒端おぞ見る。

斜ならず

花や咲くらん

濡れざらまし

明治三十八年十月二十一日、東郷大將の訓示

叔感斜ならずして、御製を賜ひぬ。曰く、

武藏野は高かやのみと思ひくに、

かゝる言葉の花や咲くらん。

又一歳、京にて細川勝元が短慮不成功といふ題を與へしかば、よめる。

急がずむ濡れざらましを、旅人の

あとより霽るゝ野路の村雨。

七 聯合艦隊解散告別ノ辭

二十閱月ノ征戰已ニ往事ト過ギ、我聯合艦隊ハ今ヤ其任務ヲ結了シテ、茲ニ解散スル事トナレリ。然レドモ我

責務

緩急ニ應ズ

武力ナルモノ
(武力トイフモノ)

形而上

至尊

等海軍軍人ノ責務ハ決シテ輕減セルモノニアラズ。此戰役ノ效果ヲ永遠ニ全クシ、尙益、國運ノ隆昌ヲ扶持セシニハ、時ノ平戰ヲ問ハズ、マツ外衝ニ立ツベキ海軍ガ常ニ其武力ヲ海洋ニ保全シ、一朝緩急ニ應ズルノ覺悟アルヲ要ス。而シテ武力ナルモノハ艦船兵器等ノミニアラズシテ、之ヲ活用スル無形ノ實力ニアリ。百發百中ノ一砲能ク百發一中ノ敵砲百門ニ對抗シ得ルヲ覺ラバ、我等軍人ハ主トシテ武力ヲ形而上ニ求メザルベカラズ。我海軍ノ勝利ヲ得タル所以モ、至尊ノ靈德ニ由ル所多シト雖モ、抑亦平素ノ鍊磨其因ヲ成シ、果ヲ戰役ニ結ビタルモノニシテ、若シ既往ヲ以テ將來ヲ推ス時ハ、

連綿不斷

終始一貫

ナラザルモ
(ナラザレドモ)
觀ズレバ

巍然タルモ
(巍然タリトモ)

征戰息ムト雖モ、安ンジテ休憩スベカラザルモノアル
ヲ覺ユ。惟フニ武人ノ一生ハ連綿不斷ノ戰爭ニシテ、時
ノ平戰ニ依リ其責務ニ輕重アルノ理ナシ。事アレバ武
力ヲ發揮シ、事ナケレバ之ヲ修養シ、終始一貫其本分ヲ
盡サンノミ。過去ノ一年有半、彼風濤ト戰ヒ、寒暑ニ抗シ、
屢、頑敵ト對シテ、生死ノ間ニ出入セシコト、固ヨリ容易
ノ業ナラザルモ、觀ズレバ是亦長期ノ一大演習ニシテ、
之ニ參加シ、幾多啓發スルヲ得タル武人ノ幸福、比スル
ニ物ナシ。豈之ヲ征戰ノ勞苦トスルニ足ランヤ。苟クモ
武人ニシテ治平ニ偷安センカ、兵備ノ外觀巍然タルモ、
宛モ砂上ノ樓閣ノ如ク、暴風一過、忽チ崩倒スルニ至ラ

(卷六)

ン。洵ニ戒ムベキナリ。

覬覦スルモ
(覬覦スレドモ)
英將ネルソン一
七九八年ナイル
河ニ佛軍ヲ、一
八〇五年トラフ
アルガー沖ニ佛
西聯合軍ヲ破レ
リ
泰山ノ安キニ
置キ

昔者神功皇后三韓ヲ征服シ給ヒシ以來、韓國ハ四百餘
年我統理ノ下ニアリシガ、一度海軍ノ頽廢スルヤ、忽チ
之ヲ失ヒ、又近世ニ入り、徳川幕府治平ニ狂レテ兵備ヲ
懈レバ、舉國米艦數隻ノ應對ニ苦シミ、露艦亦千島樺太
ヲ覬覦スルモ、之ト抗爭スル能ハザルニ至レリ。翻ツテ
之ヲ西史ニ見ルニ、十九世紀ノ初二當リ、ナイル及ビト
ラファルガー等ニ勝チタル英國海軍ハ、祖國ヲ泰山ノ安
キニ置キタルノミナラズ、爾來後進相襲イデ能クソノ
武力ヲ保有シ、世運ノ進歩ニ後レザリシカバ、今ニ至ル
迄、永ク其國利ヲ擁護シ、國權ヲ伸張スルヲ得タリ。蓋シ

殷鑑

發展

滿ヲ持シテ

神明ハ……授クルト同時ニ……褫フ

此ノ如キ今古東西ノ殷鑑ハ、爲政ノ然ラシムルモノアリト雖モ、主トシテ武人ガ治ニ居テ亂ヲ忘レザルト否トニ基ヅケル自然ノ結果タラザルハナシ。我等戦後ノ軍人ハ深く此等ノ事例ニ鑑ミ、既有ノ鍊磨ニ加フルニ戦後ノ實驗ヲ以テシ、更ニ將來ノ進歩ヲ圖リテ、時勢ノ發展ニ後レザルヲ期セザルベカラズ。若シソレ常ニ聖諭ヲ奉體シテ、孜孜奮勵シ、實力ノ滿ヲ持シテ放ツベキ時節ヲ待タバ、庶幾ハクハ以テ永遠ニ護國ノ大任ヲ全クスルコトヲ得ン。神明ハ、唯平素ノ鍛鍊ニ努メ、戦ハズシテ既ニ勝テル者ニ、勝利ノ榮冠ヲ授クルト同時ニ、一勝ニ満足シテ治平ニ安ンズルモノヨリ、直ニ之ヲ褫フ、

古人曰ク、勝ツテ兜ノ緒ヲ締メヨト。

八 國旗と軍旗

○ノヲ○ニ○ノヲ○トシテ
○ノヲ○ニ○ノヲ○トシテ

即、則

何ぞそれ……雄大なる

則、即

純白の地は皓潔の性、眞紅の紋は至誠の情、白は平和沈靜を表じ、赤は熱烈活動を示す。抑、列國いつれも國旗の制なきはなく、國旗は即ち邦家の歴史、國民の理想を語る。白地日章の旗はわが國體の徽章、國民精神の記號、翻としてその風に閃くを望めば、何ぞそれ鮮明にして純一に、端正にして雄大なる。

牆を高くして獨り自ら守るものは、未だ國家の標號を要せず、廣く世界に交はり、列國に對するに及びて、則ち

交渉
安政元年は二五
一四年、徳川家
定の時

遼遠

なりきといふ

國旗なかるべからず。古わが國にはその定なかりき。幕末の世、繁く海外と交渉するや、安政元年七月、幕府令して、日章旗を以て日本總船印として、外船に紛れざらしめ、後數年、使節を北米合衆國に遣はしたる時、これを國旗として用ひしめぬ。國旗の起源かくの如しといへども、紋章の由つて來れる所は遼遠なり。畏くも皇祖の御名は大日靈貴おほひるめのみことまた天照大神と申し奉り、歴代の天皇は天つ日嗣にまします。大神一たび磐戸を閉ぢたまへば六合晦冥なりきといふは、天日と徳を等しくしたまひしなり。小野妹子の使して隋に行くや、勅書に曰く、日出處の天子書を日没處の天子に致すと。日本を以て名と

措(置)

何かあらん

するわが國が國旗の紋とすべきもの、日章を措いてはた何かあらん。

跋扈
儀容
昭代

軍事に用ふるには軍旗あり、軍旗は聯隊毎に一旒あり。抑、旗幟は軍隊の主腦として、兵士を統率するが爲に、缺くべからざるものなるが、古代にあつては、新田の中黒足利の二つ引兩の如き、一門一黨の私旗に過ぎず。天皇の御旗としては錦旗ありしかど、武家跋扈の世には、御旗の風弱くして、皇軍の儀容を示す機會も少かりき。維新の際に至りて、帝威頓に揚り、爛として錦旗の輝く所、四民これを仰ぎて、世は直に明治の昭代となれり。明治三年、陸軍の旗章を定められ、同七年一月廿三日、近

車駕
與、舉、譽

衛歩兵第一、第二聯隊の編制成り、車駕日比谷練兵場に親臨ありて、聯隊旗授與の式を舉げたまひぬ。爾來聯隊の編制ある毎に、これを授與せらる。その式極めて嚴肅に、聯隊にては年々その當日を記念日として、軍旗祭を行ふ。

宿ります
殞るとも

わが國民は、平時は熙々たる春日の如く穩和なれども、戦時は熾烈の光に敵國を懾伏せしむ。わが軍旗はよくこの意氣を表せり。軍旗は軍隊の精神の在る所、天皇の威靈の宿ります所なり。その儼として立つ所は大元帥陛下の御馬前に同じく、これを失へる軍隊は頭腦なき四肢なり。將卒すべて傷つき殞るとも、なほ一兵の存す

硝煙彈雨

譽、舉

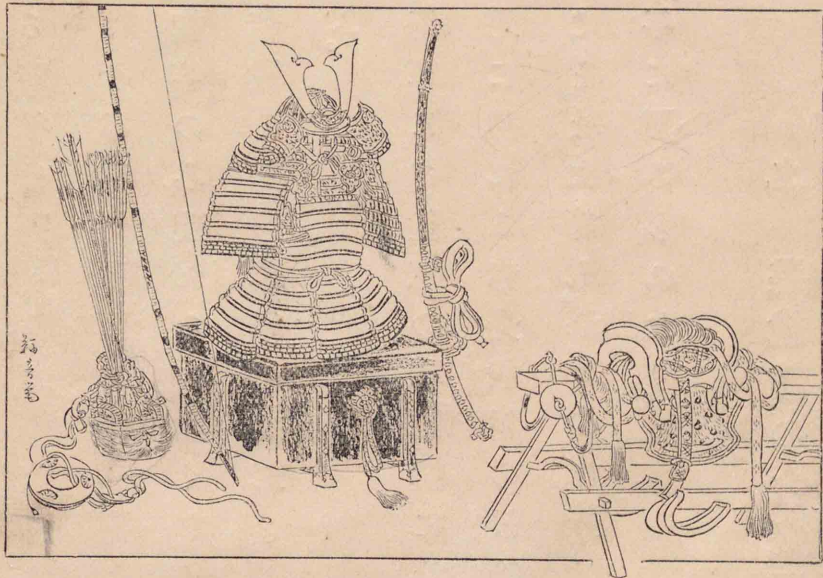
る時、彼は死を以て軍旗護衛の任に當らざるべからず。されば硝煙彈雨に汚れ裂け、碧血迸注の痕を印し、殆ど旗竿のみ残れるが如くなりても、軍旗は更に改造せず、苦戦の記念、名譽の表彰として、永くこれを保持すといふ。

海軍にて陸軍の聯隊旗に比すべきは、それ軍艦旗か。艦尾に翻れる赤光放射の日輪が、一艦の精神の歸宿たること、また等し。海軍の旗章は明治三年に定められ、同四年に更められたり。

九 遊就館の古武器

國家の盛衰
戰術の變遷

壯烈の感、懷
古の情



靖國神社の鳥居を入れば、右の方立ち並ぶ木々の間に巍然たる煉瓦造の一館を見るべし、これ即ち遊就館なり。館内には古今東西の兵器を陳列して、公衆の縦覽を許す。往いてこれを見れば、國家の盛衰、戰術の變遷眼のあたり見るが如く、壯烈の感、懷古の情交り、俯仰低回して去ること

能はず。

滋籐の弓の握りぶとなる……征矢の根の鋭げなる

あるは

さるが中に

まづ現代の武器の精銳なるに驚きぬ。廿七八年及び卅七八年の戰役の戰利品は、一としてわが國民が忠勇報國の記念にあらざるはなし。古代に派れば、火矢と唱へし頃の銃砲を始め、槍、薙刀、旗幟の類とりくに多く、滋籐の弓の握りぶとなる、箠に盛りたる征矢の根の鋭げなるも、今の世には珍し。かなたの一室には、兜の星畫なほ耀きて、前立の龍頭火焰を吐き、緋緘の鎧あるは紫萌黄など各色を競ひて、籠手の肱おし張りつゝ控へたるは、昔ゆかしく花やかなり。さるが中に、新古の刀劍、鈍寒くして、冬の氷の凝りたる

勇みつべし

宋の歐陽修日本
刀の歌を作れり

申すもかしこ
重代

なりにければ

如く、日を貫くとかいひけん白虹の光も、かくやとばか
り思はるゝを見れば、目さむるやうにて、心神おのづか
ら勇みつべし。抑、昔よりわが國の刀劍の他國にすぐれ
たることは、異朝の人さへ日本刀の歌を作りて賞めた
たへたるにてしるく、皇祖皇宗の御世より御國の寶と
して傳へ給へる神劍は申すもかしこし。源氏の重寶た
る鬚切、膝丸、平家重代の小烏丸を始として、武威盛んな
る世には、劍を以て武士の魂と貴び、之を鍛ふ者、はた天
國、宗近の古きより、吉光、正宗、義弘等の如き名匠の世に
聞えたるもの少からず。

然るに近き頃より戰鬪の術も歐洲の風になりにつれ

由緒

敵愾

秘藏せまほし

ば、御國の劍はやゝ用なきやうになりぬ。されど太古よ
りわが國の名物として、異國人にもたゝへられ、幾多の
由緒と歴史とを有すれば、一度これを見んものは、知ら
ず識らずに敵愾の氣をも奮ひ起しつべし。あはれ、この
劍ばかりは今より行くするもなほ日本男子の魂とし
て、われ人必ず一振は秘藏せまほしき心地するかな。

(關根正直)

一〇 愛郷心

郷を思ふ心は即ち國を愛する心の根源なり。今や封建
割據地を劃して自ら守れる風、蕩然として地を掃ひ、北
は樺太南半より、南は臺灣に至るまで、全國盡く統一し、

汲々とし

故山

要素

非すとせず

ウォルタースコットはスコットランドの詩人小説家

嘗、曾

相和し、相親しみ、以てこの邦土を守護せざるを得ざる時なり。徒らに一郷里、一地方の利害に汲々とし、爲に他郡他縣を疎外するが如きに至りては、痛く責めざるべからず。然れども故山の風光に眷戀たる心は、即ち國家を思ふ念慮の要素なれば、必ずしも獎むべきものに非ずとせず。
ウォルタースコット嘗てナポレオンを傳し、評して曰く、彼の事業たる、宛も獅子の洞窟より躍り出て、奮迅馳突唯獸類を追ひて直進して、わが洞窟を忘れたる者の如しと、これ非なり。ナポレオン嘗て曰ふ、吾常にコルシカ島の事を思うて樂しめり。帝位に即きて巴里の大都に榮

(卷六)

案排

盡しし

.....幾何
.....幾何

滅しし

曾、嘗

華を極めし時も、時ありて生地のを思ひて、全く他事を忘るゝこと屢なりき。傍人或はわが沈思するを見て、列國に對する雄大なる策略を案排すと思ひたらんが、わが夢は偶、故山を繞りしのみと。彼が一舉一動悉く佛國の爲に盡しし熱心は、一はこゝより湧き出でたらんか。その始めて中尉となりて戰場に馳せ向ひしより、人の城を屠りしこと幾何、人の國を滅ししこと幾何。而して大西洋の一孤島に空しく骨を埋むるに至るまで、時刻々佛を思ひ、佛を愛する心情は、曾て身を離るゝことなかりき。
少年の故山に歸省するは、後日力を國家に致さんため、

故舊

いふを俟たず

孝者百行之本
(孝經)

心胸を開き

豫め心膽を鍊磨するに、與りて力なしとせず。その父母兄弟親戚故舊と手を握りて舊を話し、欣欣として喜び、熙々として楽しむが如きに至りては、固よりいふを俟たざるなり。云ふ、孝は百行の本と、この語今尙動かすべからざる至理を含む。願はくは彼等が幾多の名山大川を跋渉して故山に歸り、既に歸りて歡を父母の膝下に奉じ、某の丘、某の水、某の樹と、そらるに幼年の幻影を呼び起し、以て釣り、以て遊び、以てわが心胸を開き、再び來りて、精勵刻苦の前月に倍數倍せんことを。

(三宅雄次郎)

一 一 イギリス人とフランス人

重んずるの厚
踏躋

約言

英人が家庭を重んずるの厚き、世界無比の稱あり。彼等は元來活動の氣に富み、本國の小天地に踏躋せずして、好んで天下到る處に移住を企つ。その移住するや、家族舉つて郷國を出で、萬里の外に英國流の家庭を樹て、小英國を植ゑ付くること、これ英人の尤も得意とする所なり。
佛人ブーミー嘗て英人が植民力に富める狀を寫して、同胞國民を警めたり。その一節を約言すれば、曰く、英人の加奈太に赴くや、初は都會の近郊に土地を求めて耕すと雖も、暫くにして惜しげもなく之を賣拂ひ、次第に深く僻遠の地に入りて、荒蕪を拓くを樂しめり。彼等は

營々
大成

日夜營々同一の業を繰返して、更に倦むことなく、耐忍
辛苦竟にその業を大成す。これ佛人の遠く及ばざる所
なり」と。わが國人亦この言に鑑みて、深く自ら警むべき
なり。

社會觀

英人が國外に向つて進取の勇を振ひ、佛人が郷國に在
りて土着の心に富めるは、平素に於ける子弟養成の道
おのづから異なるが故なり。英佛二國の社會觀を爲す
者常に曰へらく、佛人はその子弟を作成し、英人はその
子弟を自立せしむ」と。蓋し佛は財産分配制を守り、英は
之に反して長子相續の法を存す。佛人の子弟はその本
國に土着すれども、拮据經營して己が受けたる土地を

拮据經營

子弟をして
…なからしめ
ん

候補者
出しし

耕す時は、まづ衣食の道を失ふことなし。その父母は勤
儉にして自ら奉ずること薄く、子弟の爲に財産を造る
に努む。彼等は、子弟が寧ろ薄給の役人と爲りて、一定の
生業を守らんことを欲し、海外遠く遊びて、求めて危き
を蹈むが如きは、百方之を避けしめんとす。近頃バンデ
リップ佛人の教育方針を評して、父母はその子弟をして
試験の通過と文官の登庸とに差支なからしめんがた
め、忡々として之を憂ふるに過ぎず」と言ひ、セイヌ縣に
於て小吏に四人の缺員を生ずるや、無慮四千四百人の
候補者を出しし著名の事實を援きて、佛人が優柔にし
て爲すなきを笑へり。かくの如く佛人は自らその子弟

の前途を定めその子弟を作成するに汲々たるなり。英人は全く之に異なり。蓋し彼等の子弟を教ふる所以は、實にその自助の道を授くるに在り。その子弟は七八歳の頃より、早くも父母の膝下を離れ、寄宿舎の設ある學校に入りて、自營の風を養成せしめらる。自助の學は自立の人を作る。英人にして身長子に生まれ、その父母の遺産と名望とを継ぎ、その郷土に棲息する者の外は、進みて海外に飛躍して、敢へてその小天地に跼蹐せざる者、實に自立の精神の之を然らしむるなり。彼等の多くが斗筲の吏たるに甘んぜず、却つて難に耐へ險を冒して、以て鉅萬の富を致さんことを欲するは、亦之が爲

名望

飛躍

斗筲

なり。

(井上友一)

一二 高田屋嘉兵衛

經綸
鵬翼を張る

拓殖

ペテロ大帝の經綸によりて、ロシヤは世界の強國となりぬ。子孫その志を繼いで鵬翼を張らんとし、注視は遠くアジヤの東北端に及び、堪察加より下つてわが北邊を覗へり。幕府意漸く安からず、吏を派して蝦夷を巡察せしめ、北門警備の第一着として、擇捉の拓殖を企つ。されど國後海峽は潮流險惡、纔に輕舟を通ずれども、時に覆没の難を免れず、大船の渡航に至りては甚だ危し。よりて幕府は令を發して、試航の船頭を募れり、これに應

寛政十一年は二
四五九年、徳川
家齊の時

緒に就き

じて立ちしは高田屋嘉兵衛なり。
嘉兵衛は淡路の人、兵庫に來りて回漕を業とし、屢松前
に航す。寛政十一年、擇捉試航の命を受け、船を艤して國
後にあり、日々海岸の高丘に登りて潮流の方向を察し、
時に小舟を泛べてその緩急を測り、終に安全なる航路
を得たり。海路通じて拓殖緒に就き、荒殘の孤嶋、漁場開
け、生計進み、夷民悦んで業に従ふ。嘉兵衛も官船を領し
て、この地に往來し、北海の津々浦々その山高の船標を
見ざるなきに至れり。
その後、ロシヤ使を派して通商を請へども、わが邦舊習
を守りて求に應ぜず。ロシヤ人これを銜みて北邊に寇

文化八年は二四
七一年、徳川家
齊の時

狼狽

腕を扼す

し、米鹽を掠め、家屋を焼き、又住民を捕ふ。邦人その暴虐
を憤りて、敵愾の念うた、熾んなりき。時に文化八年、千
島近海測量の爲に露艦の國後に來れるあり、わが兵艦
長ゴロブニン以下數人を拘留す。副長リコールド艦首
を回して去りぬ。
その翌年、嘉兵衛は、脯魚を船に積み、擇捉より函館に
向へるに、一隻の露艦忽然として途を遮り、端艇を下し
て來り襲ふ。船中徒らに狼狽し、嘉兵衛獨り腕を扼すれ
ども、如何ともする能はず、意を決して敵艦に行く。艦中
にはリコールドあり、ゴロブニン等の安危を虞り、救助
の策を講ぜんとして、この舉に出でしなり。嘉兵衛敵中

無辜

に入れども神色自若、無辜の水夫を免して、おのれ一人を捕へんことを請ふ。リコールド一見して敬畏の色あり。されど水夫のうち四人を選んでこれに伴なはしめ、携へて堪察加に向つて去る。去るに臨みて、嘉兵衛書をその弟に贈りて曰く、天涯の俘虜なほ報國の微志を存す。願はくは一身を擲ちて兩國の葛藤を解き、北邊をして永く無異ならしめんと。

贈、送

葛藤

風物

節を屈す

朔風雪を捲いて風物悽慘、嘉兵衛は遠く海外に捕はれてなほ節を屈せず、刻苦してロシヤ語を學べり。漸く用語の自由を得て、則ちリコールドに説いて曰く、君が余を捕へ來れるも、日露兩國の和好を全くせんが爲なら

る

書を裁し

ん。余が恥を忍んでここに留れるも、その意は一なり。然れどもわが國人がゴロブニン等を捕へたるは、ロシヤ人の劫略を憤れるが爲のみ。貴國まつ罪あり」と。リコールド曰く、かの劫略は一私人の暴行にして、わが政府は與り知らず、これによつて日本の怒を買へるは冤なりといふべし。これを和解する策如何」と。嘉兵衛膝を進めて曰く、果して然らば、貴國は書を裁して他意なきを辨ずべし。事情もし明かならば、わが國また怨を釋かん。余一個の民といへども、應分の力を盡さざらんや」と。誠意面に現る。リコールド痛くこれに感じ、互に心腹を傾けて、邦家の爲に奔走すべきを約せり。

應分

荏苒 得策

送、贈 狐疑

異郷にありて歳は改りぬ。水夫の二人は既に死し、嘉兵衛また病あり。リコールドも荏苒日を過すを得策にあらずとし、官書の來るを待たず、春風海を渡つて堅氷の解くると共に、嘉兵衛等を伴ひて國後に來りぬ。船灣に入るや、生き残れる水夫二人を使として上陸せしめ、これを脅して曰く、「もし歸り報ずることなくば、再び汝等の主人を捕へ去り、また武備を整へて來り攻むべし」と。嘉兵衛小筐と佩刀とを水夫に託して家人に寄せ、これを送つて後、毅然として容を改めて、リコールドに對つて曰く、「卑賤の匹夫いかんぞ重任を負ふべき。君今に至つて余を信ぜず、狐疑は大事を妨ぐ。再び余を捕へ還

色を失ひ 調停 周旋 握手

栽(栽、載、載、戴)

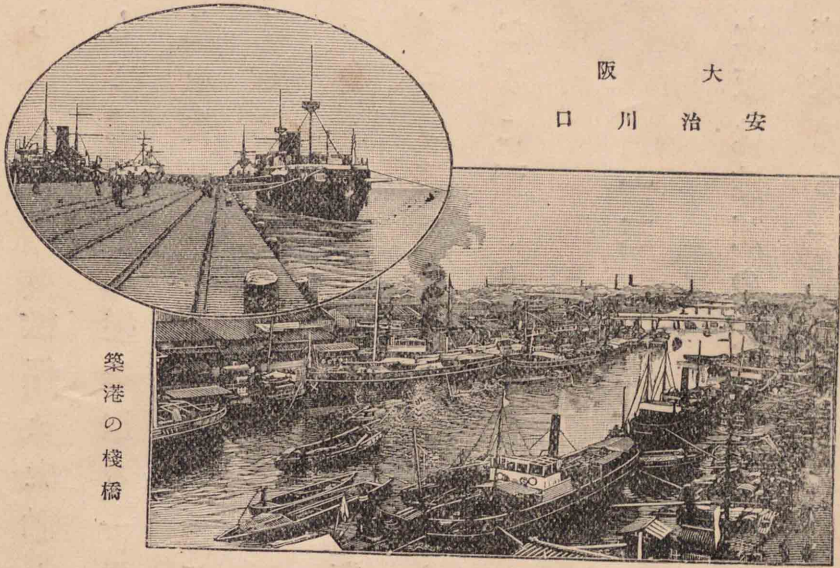
らんとすとも、微軀また動かすべからず。余既に死を決して筐中の遺髪を送る、一刀こゝにあり」と。リコールド色を失ひて前非を謝し、直に上陸して調停に従はしむ。嘉兵衛曰く、「功もし成らずば、余も何の面目ありてか生を貪らんと。かくして嘉兵衛は周旋甚だ力め、遂にゴロブニン等を釋放し、兩國をして舊怨を棄てて握手せしむるに至れり。

一三 大阪

大阪は淀川の河口にあり、もと難波といへり。その邊は廣大なる一面の平野にして、綿、菜種の栽培に適し、春日

たらんが如し

大 阪
安 治 川 口



般販

菜花盛んなる頃は見渡す
 かぎり黄金を布きつめた
 たらんが如し。この平野は元
 來淀川、大和川の流域に當
 り、これより流れ下る泥砂
 の堆積して成れるもの
 して、江流尙絶ゆることな
 く土壤を送り來れば、古來
 地勢の變遷頗る著し。され
 ば今船場せんばと稱して最も般
 販なる地は昔船舶の碇泊

畿甸

錨を抜き

せし所なるべく、今も續いて新田の増加するを見る。
 史を按ずるに、神武天皇の東征したまふや、舟師を率ゐ
 て難波の崎に到り、これより流を沂りて畿内に入りた
 まひしが、征戦利あらず、更に軍を還し、海路紀州を廻り
 て、遂に大和に入りたまへり。天皇はじめ難波に着きた
 まひし時、奔潮太だ急なり、因りてその地を浪速と名づ
 けたまひき、難波はこれを訛れるなり。
 難波は畿甸の咽喉にして、西國往還の關門なり。されば
 上古、中國、四國、九州に通ふ船はいふに及ばず、韓地、支那
 に向ふものもまづこゝに錨を抜きたり。神功皇后が韓
 國を征服したまひし後、外國の朝貢、文物の傳來數なる

……に過ぎざれども

に至りしかば、仁徳天皇は都を高津に遷したまへり。推古天皇の朝に使節の交換ありしよりこのかた、支那との交通頓に頻繁となり、大化の改新を斷行したまひし孝徳天皇は、また都を長柄の豊崎に奠めたまへり。帝都となりしは、この二回に過ぎざれども、遣唐使の出入、外客の來朝はいづれもこの津頭よりし、陸には鴻臚館の設あり、海には帆檣常に林立したりき。その後、宇多天皇の朝に遣唐使を廢せられしより、外國交通は杜絶し、偶、京人が住吉、天王寺に詣で、潮湯に浴せんとてこゝに來り、もしくは西南の地に旅するもの立寄るはありしかど、難波の繁昌はまた舊の如くなる

杜絶

……は與らず

明應元年は二一五二年

掘、堀

こと能はざりき。足利氏の時、明との交通新に開かれしが、當時貨物集散の中心は堺の津にして、難波は與らず。明應の頃、一向宗の僧蓮如が生玉に石山本願寺を建てしより、大阪復興の運は萌せるなり。豊臣秀吉本願寺を修築して金城鐵壁を構ふ、即ち大阪城にして、併せてまた市街を起し、伏見、堺の町人をこゝに移せり。當時、安井道頓洲渚を埋め、溝渠を掘りて、土木の功大いなり、道頓堀の名これより出でたり。徳川氏の世の初、大阪城代松平忠明また努力して市政の改善に従事し、これより繁榮年々加り、廻船遭運の便は天下の富を湊め、豪商富估軒を列ねて、實にこの地はわが國に

經濟

標準

麾下

於ける經濟の中心となりぬ。俗に大阪は日本の臺所といひ、諸侯は藏屋敷を設け、藩國に産する米穀、その他の物産を送り來りて、こゝに販賣せしむ。市場の最も盛んなるは堂島の米市にして、その相場を標準として全國の米價は定まる。米市は、秀吉の頃、與右衛門といふもの、淀の長堤を修築して巨利を博せしより、淀屋と稱し、商業に従事して、豊臣氏の麾下に糧米を給し、又門前に市を立てて廣く米穀を賣買せしに始まりぬといふ。

この地東方一帶は丘陵をなし、漸次西に向ひて低下し、淀川は市中を貫流して海に注ぐ。市街はこれを引きて水流縱横に疏通し、數百の橋梁參差として横たはり、物

市民が積年の希望

質の運搬極めて敏活なり。現今は鐵道またこの地を中
心として四通八達し、市民が積年の希望たる築港も、ま
た遠からずして完成せられんとす。

〇一四 木曾の奇勝

早くも更けて

須原驛に着きしは、夜の九時頃なりしが、山中の荒驛は
早くも更けて、冷露聲なく、玉兔徐かに轉ずる良夜も、更
に賞する人なく、旅亭は既に戸を閉ちたるもの多かり
き。わが宿りたる室は恰も木曾川の流に沿ひて、水聲近
く枕に通へり。

翌朝、名物の花漬一箱二箱を買ひて、旅亭を出づ。旭未だ

静けさと淋しさ

ものとしも覺えず

標柱の立てるモノを

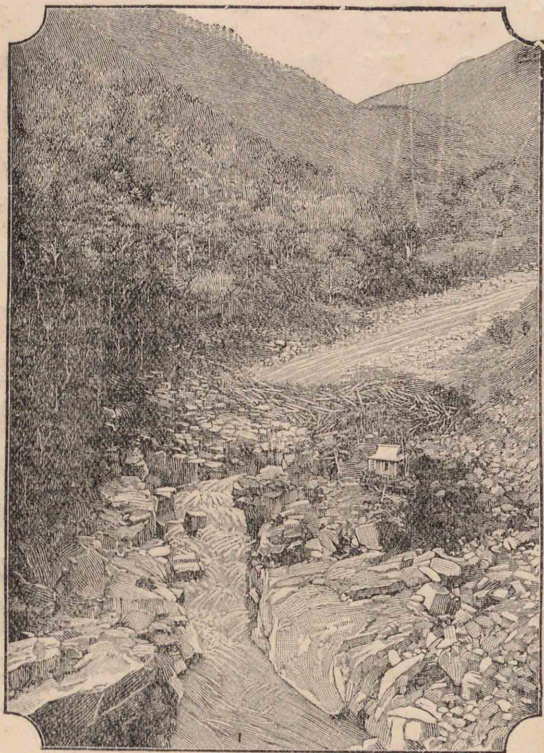
添、沿、副

昇らず、曉露の繁きこと雨の如し。霧は次第に東山より霽れて、未だ寢覺に到らざるに、日影は早くも對岸の山の半腹に及びぬ。空氣は極めて清澄にして、その中に言ふべからざる秋の静けさと淋しさを交へたり。木曾川の溪流よりは朝の水煙盛んに升りて、水聲の潔きこと人世のものとしも覺えず。寢覺の床の名は、かねて耳に熟せるところ、路傍にその標柱の立てるを認めて、直に路をもとめてこれに赴く。臨川寺の庭に踞して、獨り徐かに下瞰するに、水はあくまで碧に、岩はあくまで奇に、その間に松面白く點綴せられたるは、更に畫圖の如き趣を添へたり。雖僧あり、寺

(卷六)

縁起

の縁起を説けるが、溪に下るべき路あるを指點して、吾を案内せんといふ。乃ち共に細徑を竹林の中に求め、石に縋り岩に凭りて、辛うじて溪に達す。



溪は急流危巖
相交はれる勝
地にして、岩石
の奇なるもの
を屏風岩、硯岩、
烏帽子岩、蓮華
岩、釣舟岩等と
す。その水の來

急駛せるコト

沿、副、添

るや、沈々として聲無く、その色の深碧にして急駛せる、
そらろにわが心を惹きぬ。岩石の中央に一小祠あり、稱
して浦島太郎が綸を垂れたる古跡といふ。岩上に踞し
て四顧すること多時、輿の盡くるに及びて、もと來し路
を求め、再び木曾川の流に沿ふ。

するを以て

旅客を以て

上松驛あひまつは、木曾山中、福島に次げる邑にして、その繁華は
中津川以北未だ曾て見ざるところ、街衢また整頓せり。
駒嶽こまがきに登る人は多くこの地よりするを以て、夏時は白
衣の行者踵を接し、旅亭は客を以て填まると聞く。
上松を過ぐれば、一度離れし木曾川は、再び來りて路傍
を洗ひ、激湍水珠を飛ばし、奇岩水中に横たはる。兩岸の

なりきと聞く
慶安元年は二三
〇八年、徳川家
光の時

寛保元年は二四
〇一年、徳川吉
宗の時

驚かざる能はず

山また漸く迫り、棧に至りて、更に有名なる一大奇溪を
現出し來る。

木曾の棧は多く古歌にもよまれ、岨高く、溪深く、路もな
きところに細き棧架け渡して、旅人の目くるめきて行
き艱むところなりきと聞くに、慶安元年、石を疊み、土を
盛りて、危さもやゝ薄らぎぬといふ。されど、かけはしや、
命をからむ薦かつら。と芭蕉がよみたるを思へば、尙意
を用ひずば、千尋の深谷に墜つべき虞もありしが如く
なるを、寛保元年、更に道路を修築してより、古棧跡なく
して、溪またかくの如く淺く平かになりたること、吾は
古今の變遷に驚かざる能はず。

副、添、沿
悪しと
見ん人

當りたらんと
もおぼしき

吾は棧の名の甚だ高きに似ず、その實のこれに副はざるを覚えぬ。されど風景としてはさして悪しといふにてもなく、見ん人の心々にて、寢覺などよりもすぐれたりと、思ふもあるなるべし。溪は長さ二町ばかり、上流より弧形を爲して流れ來りたるが、その弓の中央に當りたらんともおぼしきあたり、最も深潭の趣に富み、溪樹の翳鬱としてその上に生ひ茂れる、また捨つべきものとしも覺えず。その深潭に臨みて、瀟洒なる一軒の茶亭あり。名物あんころ餅は旅客の大方は憩ひて味はふところ、又紅葉の頃になれば、來り遊びてこの亭に一日を暮すもの甚だ多しといふ。

(草枕による)

(巻六)

一五 秋の歌

なかりけり
ゆふぐれ

みこたせば花も紅葉もなかりけり、

浦のとまやの秋のゆふぐれ。

(藤原定家)

天の原ふきすすさびたる秋風に

走る雲あれば、たゆたふ雲あり。

(穉取魚彦)

ものゝふの苔むすかむね年ふりて、

秋風さむし桔梗が原。

(加藤美樹)

夕風よきよる渚のさゝら波、

水にも秋の聲はありけり。

(加藤千蔭)

おひ征矢を手ばさそもちて見さくれば、

弓張月_二雁なき_一こたる。

(久米幹文)

〇一六 圓山應舉

圓山應舉字は仲選、通稱を主水といへり、丹波國穴太村の人なり。百姓の家に生まれたるが、耕耘を好まず、田に出でて竹を以て地上に畫く。父母これを村内の金剛寺に遣りて僧とせんとせしが、それにも從はずして京に出で、石田幽汀を師として畫を學ぶ。幽汀は狩野派の繪師なり、應舉は技術の進むに隨ひて、その教に満足せず、洛中、洛外の大寺を巡りて、その所藏の名品を觀、元明の古畫によりて益を得ること多く、又光琳風の筆意を

をしへ(教)

光琳風は元祿の頃尾形光琳の起せるもの

……の本意は
……するに
あらず、……
……するにあ
ることを……

も交へ、時には西洋畫の長所をも考へ、畫道の本意は古人の筆蹟を摸擬するにあらず、これを津梁として、みづから自然に接するにあることを悟りて、遂に寫生の一

派を立てたり。

實物の寫生は、今日より見れば普通のことにして、ことさらに賞むべきほどにもあらずといへども、百五十年ばかりの昔にこれを試みたるは、非常の見識と膽力とを



る

覇權を握り

文人畫は池大雅・與謝蕪村等の唱道によりて大に行はれた

あふ(仰ぐ)
た(絶)え

浮きつ沈みつ

要することなりき。その頃、狩野氏畫界の覇權を握りて恣に子弟を束縛し、子弟は師家の手本のとほりに學ぶのみにして、その間に己の工夫を加ふれば、却つて破門の辱を受くること多し。別に文人畫の一派も行はれたれども、支那の古畫に泥みて、その外に出づる能はず。この時に當りて、應舉が時習を脱して直に自然を師としたるは、非常の英斷にして、その風を仰ぐもの今に至りて絶えざるも、當然のことなり。應舉の寫生は形似の末にのみ苦心するにあらず、力めて鳥獸蟲魚が活動の様を現さんとす。轉がり合ひて遊ぶ狗の兒、浮きつ沈みつ泳ぎ回る鯉の群、雛をつれて餌

る(餌)

をど(躍)る

目のあたり

るのし(猪)

會得

をあさる雌雄の雞など特に巧にして、生氣溢れて絹紙の外に躍る。その寫生に熱心なりしことについては逸話あり。嘗て臥猪を畫かんとせしが、目のあたりこれを見たることなし。薪賣る老婆に尋ねしに、洛北八瀬邊の山中には稀に見ることありといふ。若しさる折もあらば早く告ぐべしと、頼み置きしに、ある日老婆のしらせあり。急ぎかけつけしに、果して藪の中に一疋の猪臥し居たり。喜びてこれを寫し、清書して鞍馬より出づる老翁に示す。老翁一見して曰く、これ臥猪にあらず、病猪なり」と。應舉驚き尋ねて、乃ち彼此の差別を會得す。老婆も亦來りて、かの猪は翌朝死し居たり」といへり。よりて圖

ついでに(衝立)

脱すること能はず(脱する能はず)

を改めて、重ねて老翁の來れる時示せるに、手を拍つて、
 「これなり、この猪は活きたり」と叫びぬといふ。その
 ほか、祇園社の衝立に雞を畫き、その羽毛と、地上の草と
 季節の相違へることを、見物の百姓に笑はれて訂正し
 たりといふ話なども傳れり。眞偽如何は知らざれども
 應舉が寫生に力を盡したることは疑ふべからず。
 應舉の畫ける人物は未だ明畫の舊習を脱すること能
 はず。されど動植物を寫して生動の妙を窮めたるは勿
 論、山水もまた筆を揮つて造化の巧を奪へり。その住所
 は京都なり、その郷里は丹波の龜岡に接して、また京都
 に遠からず。元來京畿の地は山水温雅にして險峻なら

随うて

覺えず

ず、随うてこれに慣れたる人の手に成りたる畫は、優美
 の態あれど雄大の氣なしと評せらるゝこと、理なきに
 あらず。四圍の感化は已むを得ざることなるが、應舉は
 なほ勉めて纖弱の弊を避けんとしたり。京に近くして
 は保津川、絶勝の名高く、怪巖相交はり、急流矢の如し。應
 舉その景を愛し、水石の間を徘徊して筆を走らせ、遂に
 一大畫を成せるもの今存す。古松の蟠り、奔湍の迸る様
 見るもの覺えず快と呼ぶべし。三井寺圓滿院の瀑布の
 大幅は、その門主が庭上の巨松に懸けたるものにして、
 これを觀るもの、腋下忽ち清風を生ずべし。穴太の金剛
 寺の襖に畫ける波濤は、砂を噛み空を捲きて大地も震

概きても餘あり

その立つや、
たはるや、
その横

いひ知らぬ

趣致

ふ感あり。應舉の大作少からず、いつれもよく活動の状を寫したるものなること、これらによりて推すべし。ただ末派の人が小景を寫して纖弱に流れ、その弊は延いて應舉の名を傷つくること、慨きても餘あり。

一七 松

その立つや、亭々として天空を摩し、その横たはるや、偃蹇として地表を盤る。十歩の庭も松の一本によりて、いひ知らぬ趣致を感じずべし。東洋特にわが日本の風景は、大方松の作れるものにして、もしこの風景より松を取り去らば、その結果は如何ならん。



(松の風景)

雲や霞や雨や
雪やの

灼々園中花、早
發還先萎、遅々
潤畔松、鬱々含
晚翠、賦命有疾
徐、青雲難方致、
寄語謝諸郎、躁
進徒爲耳

必ずや。

山を見よ。雲や霞や雨や雪やの天然の氣象により、花に紅葉に、周囲の添景により、その趣は千變萬化すといへども、未だ曾て松がその中心たるべき地位を失ひしことあらず。見るものをして、その風光を稱へしむると共に、おのづから崇高雄偉の感を起さしむるは、松の品性の感化に因ること多し。特にその鬱々として晚翠を含める姿は、高德の君子が、堅忍不拔、超然として世俗を出でたる風あり。これ范魯公質の借りて以て少年の躁進を戒めたる所以にあらずや。

海の風景を論ずるものも亦必ずや白沙青松といふ、松を外にしてはその風景の成り難きを知るべし。わが國

あらずや。
名所の……具
ふるにあらず

春や來ぬらん
なくんば
ば、なげれば

の絶勝といはるゝ三景も、天の橋立と松島とは松の風景にあらずや。その他、三保の松原といひ、住吉の濱といひ、苟くも名所と稱せらるゝところは、殆ど松を具へざるはなし。否々、名所の松を具ふるにあらず、松ありて始めて名所たる資格を得たるならん。

和歌の浦を松の葉ごしに眺むれば、

梢によする海士の釣舟。

(寂蓮法師)

大伴のみつの濱松かすむなり、

はや日の本に春や來ぬらん。

(宗尊親王)

おだやかなる海、うらゝかなる春、松なくんば則ち景致なからん。

根柢(底、抵)

彈丸黒子の地

正朔

こゝに於てか

更に海上の孤島を見よ。危巖高くして飛鳥も亦息ふ事を憚るならんと思はるゝあたりにも、苟くも一勺の土だにあらば、尙よく根を託して蟠屈す。執着の念、堅忍の性、殆ど他に類を見ず。風颯々として一たび空を渡らんか、怒濤岸を穿ち巖を噛み、おのれの脚下に迫りてその根柢を危うす。然れども尙平然としてその所を守るに至りては、一死報國の忠臣楠公が、千早城頭、八十萬の敵兵と應戦し、從容として畫策を誤らざりし忠節と、亡國の遺民鄭成功が、彈丸黒子の地に明の正朔を奉じて清朝に降服せざりし壯烈とを連想して、欽慕の情に禁へざらしむ。こゝに於てか、松はあらゆる武士的美質を發

揮して遺憾なきものといふべし。

(鳥野幸次)

一八 鎮守の森

風情

満目蕭條として、田も畠も霜枯の風情見るかげもなき
 間に、一むらこんもりとして緑鬱葱たるものは、鎮守の
 森なり。金も石も燦けんばかりの夏の眞晝中に、一陣の
 涼風殿角より起りて、社前の注連繩さら〜と鳴れば、
 こゝは子守、田夫等の安樂世界となりて、拜殿に晝寐の
 夢は圓かなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲
 きこぼれて一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の
 蔦蘿紅を染めて夕日の色もまばゆし。花朧なる曉、月明

夢は圓かなり
花信

詩趣

き夜、松杉暗くして、瑞籬のほとり神さびたり。詩趣獨り
 こゝに饒にして、何事のおはしますかは知らねども、神
 神しく覺ゆるなり。

涼を趁ふ

復と得がたき

日落ちて月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、
 鎮守の森は舞踏場と化するなり。祠頭の旗幟翩翩とし
 て風に靡く時、満村の老幼織るが如く、鎮守の祭禮は、一
 歳中復と得がたき歡樂たるなり。年豊なれば詣り謝し、
 天旱すれば雨を乞ふ。洵に鎮守の森は一村の望を聚め、
 一郷の中心として、神聖なるしかも面白き所たるなり。』
 かゝる鎮守の森にいます神は、多くはその土地、その土
 着の民と何等かの關係あり、遡つて之を考ふれば、氏族

神聖なるしか
も面白き

部民がその祖先を祀りたるものも少からず。諸國に鎮座したまふ神社は、畢竟鎮守の森の大いなるものなり。鹿島、香取の神宮は、經津主神、武甕槌神の子孫が創めたる所にして、宇都宮二荒神社は、毛野君の一族がその祖先を祀れる所なるべし。その一層大いなるものには、出雲大社あり。その最も大いにして日本の鎮守たるものには、五十鈴川の上に宮柱太しき高き伊勢大神宮もあらせ給ふなり。

これを小にしては一村の中心にして、これを大にすれば帝國の中心なり。祖先の神靈、前賢の精魂は長へに鎮守の社中に留りて、子孫後人の精神に通ひ、彼等をして

これを小にしては……、これを大にするれば……

天佑

權道

興奮劑

……森をし
て……あら
しむべきなり

奮勵自進せしむべし。天佑神助の信仰は勇氣鼓舞の最良法なり、しかも信仰とは權道に非ず、方便にあらずして、直に神に接し靈に感ずる唯一の法なり。

祖先崇拜なるかな。これ獨り原始の觀念のみにあらず。祖先の功勳は後人奮勵の料たり、子孫の名譽心を發揮すべき興奮劑なり。但その崇拜をして保守的たらしむる勿れ、回顧的たらしむる勿れ、進歩的たらしめざるべからず、自覺的たらしめざるべからず。

こゝに於てか鎮守の森をして、一層、一村一郷の中心たるの實あらしむべきなり。森をして神さび、靈の窟宅たるに適せしむべきなり。これが爲には樹の苗を植ゑ、草

修(治、收)

美の觀念

萊を去り、祠宇を修め、園池を美にすべし。一村一郷の崇敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき田夫にも美の觀念を與ふる所、村人の誇とする所、他郷に在りても猶戀々の思あるべき所たらしむべし。小學兒童の運動會も之を中心としてこの附近に行はしむべし、小やかなる村落圖書館の如きもこのほとりに設けらるれば、尤も妙なるべし。鎮守の森をして一村一郷の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の上を得る所極めて大いなるものあらん。

(笹川臨風)

一九 逗子の冬

北風を背にし、枯草白き沙山サヤマの崖に腰かけ、脚なげ出して、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつゝ、沖より歸る父の舟遅しと待つ逗子邊の童の心、その淋しさ、うら悲しさは如何あるべき。御最期川の岸邊にしげる葦の枯れて、潮風に騒ぐその根かたには、夜半の満潮に人知れず結びし氷、朝の退潮に破られて残り、ひねもす解けもえせず、白き線を水際に引く。若し旅人疲れたる足をこの濶に停めなば、何心なく見廻して、何等の感もなく行き過ぎ得べきか。見かへれば、彼處なるは哀を今も七百年の後に援く六代御前の杜ツツなり。木枯その梢に鳴りつ。

人知れず

解けもえせず

哀を今も七百年の後に援く
六代御前は平維盛の長子、此地にて斬られたり

前ぶれをか爲しつる。唯見る、……櫓あやつるをのこ

……歩まする。畫めきたるを見る

落葉を浮かべてゆるやかに流るゝこの沼川を漕ぎ上る舟、知らず、何れの時、心地よき追分の節面白くこの舟より響き渡りて、霜夜の前ぶれをか爲しつる。あらず、あらず、唯見る、何時もく、物言はず、笑はず、謠はざるをのこの、農夫とも漁人とも見分け難きが、淋しげに櫓あやつるを。

鍬かたげし農夫の影の橋と共に隴に川面に映る、かの舟音もなくこれを搔亂し行く、見る間に舟は葦がくれ去るなり。

日影なほ鑑摺の端にたゆたふ頃、川口の淺瀬を村の若者二人裸馬に跨りて徐かに歩まする、畫めきたるを見

（第六）

立てで

ることもあり。かゝる時、濱には見わたす限、人らしきものの影なく、曳き上げし舟の舳しぼに止れる鳥の、聲をも立て、羽打ものうげに鎌倉の方さして飛び行く。

（國木田獨步）

二〇 宇宙の浩大

粟散碁布

一見

晴夜仰いで天穹を眺むれば、許多の星辰の粟散碁布するを見るべし、これ等は一見無數なるが如くなれども、肉眼にて望む時は、蓋し七千より多からざるべし。但し更に最強力の望遠鏡を用ふる時は、その數これに數萬倍し、凡そ一億五千に上るべし。これ等の星辰は、僅ばかりの遊星を除きて、他は皆恒星と稱し、わが太陽の如く

想像にも及ばず

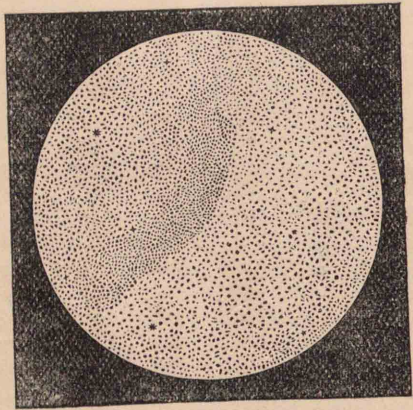
費さずんば
(費さざれば)

經ずんば
(經ざれば)

自ら光を放ちて耀くものなり。故に太陽が恒星の一として數個の遊星を牽るるを見れば、彼等にも亦同様の遊星あるべし。
各恒星間の距離は極めて大にして、多くは我々の想像にも及ばず。わが太陽に最も近き恒星は、セントール宮のアルフ星と稱するものにして、その距離は凡そ十兆五千億里に及び、實に太陽、地球間の距離の二十七萬五千倍に當る。故に一秒間に七萬六千里の速度を以て疾走する光線と雖も、尙四箇年半を費さずんばこの間を通過する能はず。若しそれ最遠の恒星に至りては、數千年を經ずんば、その光我々の眼に達する能はざるべし。』

齊(等)

その實



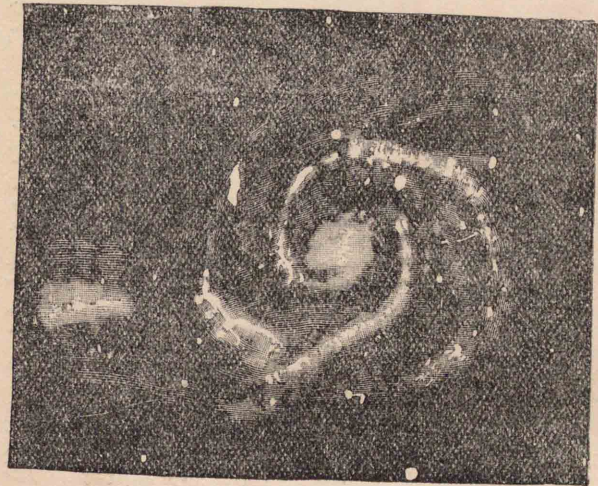
部一の河銀るた見てに鏡遠望

天穹には、又最大の圓形をなして之を取り巻く一條の白帶あり。これ即ち銀河にして、肉眼にて望む時は、一面に齊しく微白色に見ゆれども、望遠鏡に照らす時は、無數の輝々たる點より成れり。蓋し銀河は數百萬の恒星相重なりて斯くは見ゆるものならん。

通常、太陽は少しも動かざるもの如くに思はるれども、その實一秒間に四里半乃至十三里の速度を以て、天の北方に位する帝座星に向ひて進行するなり。これと同様に、從來不動體と

思はれしは、
……に由れり

見做されたる恒星の中にも、亦運動するもの許多あるを發見せり。これ等の嘗て不動體と思はれしは、その距離あまりに遠きに過ぎ、極めて精密なる觀測にあらず



星雲霞

んば、その運動を認むる能はざるに由れり。これに因つて推す時は、恒星は皆この通則に従ひて運動するものと見て不可なかるべし。わが地球は巨萬の恒星のなる太陽に隨伴する遊星の中の一小星なり。故に之を星

滄海の一滴に
だも

既に……
判然したれば

辰世界の浩大なるに比すれば、滄海の一滴にだも及ばざるなり。然るに天には猶數千の雲の如く霞の如き小點あり。これ等は霞雲星と稱し、多くは強度の望遠鏡にあらずんば、見る能はざるものなり。而して既にその一部が無數の小輝點より成れること判然したれば、これ等は皆蓋しわが星辰世界の外の星辰世界なるべしと云ふ。之を以て考ふる時は、宇宙は浩大無疆、その闊き事到底人智の測り知るべからざるものなるべし。

(地球の過去及び未來)

二一 小話二則

その一

一人ぞ出入しける

法師ばかりぞ物は申さぬ

をこがましくこそ覺ゆれ

ある山寺に四人の上人ありけり。契を結びて道場へ入り、四人座を並べ、七日の無言を始む。承仕一人ぞ出入しける。こゝ小更たけ夜ふけて、燈はきけんとするを見て、下座の僧「承仕、火かきあげよ。」といふ。並の座の僧「無言の道場小物申す様候はず。」といふ。第二座の僧「二人とも小物いふ事、何まりにこゝちあゝく覺はて候ふ、物小狂ひたまふを。」といふ。上座は老僧、様へかそれども面々小物いふ事、何さまよくもどあしく覺はて、法師をありぞ物の申さぬ。」といひてうちうをづきけり。かしこげよて、特よをこがましくこそ覺ゆれ。

その二

無沙汰 不覺

べくばこそアラメ
何をかつき候ふべき
この難こそありけれ

常州の東城寺へ、ある寺法師の學匠ありけり。他事なく經文小眼をさらし、修行れこゝりあき上人なり、世間の事へ無下は無沙汰なり。ある時、弟子ども小語りていはく、「世間の人愚ふして、物はかりごと不覺なり。法師興ある事案へ出したり。杵一つよて白二つ搗くべき様あり。一つは白の常の如く置き、一つは白の空へ下へ向けり。吊るべし。さて杵を上げ下さんに、二つは白を搗くべし。」といふ。弟子は「いよく、上の白には物おたまり候ふべくばこそ。何をあつき候ふべき。」といへば、この難こそありけれとて、つまりにけり。

(沙石集)

二二 鳥居元忠

慶長五年は二二六〇年
徳川殿は家康、上杉中納言は景勝

かゝる所に

料に侍り

……こそ取り給ふべけれ

慶長五年六月十七日、徳川殿上杉中納言を御退治あるべきにて、奥に向はせ給ふ時、元忠を始めて宗徒の御家人を選ばれ、伏見の城に留めらる。かゝる所に上方また一時に兵起り、秀頼の御使伏見の城に來りて、その城速に開き渡すべき由を下知す。元忠その由を聞きて、吾等がこの城に残り留りし事、かゝる時の料に侍り。參らざる事叶ふべからず。猶も參らせよと候はんには、唯攻め破りてこそ取り給ふべけれ」と答へて、城下の人家焚き拂ひて、寄せ來る敵を待つ。元忠人々を本城に集めて、多

八八

都合 究竟

からぬ御方こゝかしこ助け合はん事叶ふべからず。唯各が固めたる所を能く防ぎて、他の勢を頼み給ふべからず。今生の見參只今を限とす。いざ最期の名殘惜まん」として、酒宴してこそ遊びけれ。
斯くて七月晦日の夜、上方の軍勢都合九萬三千七百人、城の四面に押寄せたり。城内には思ひ切つたる究竟の兵籠りたれば、たやすう落つべしとも見えず。明くれば八月朔日、城中忽ちに返り忠の者出來て、本城に火かゝり、敵こゝかしこに入る。元忠が手のもの百三十七人戦死し、殘る所僅に四十八人、家子郎從はや御自害あるべし」と勸む。元忠あざ笑ひて、いや〜思ふ子細あり、自害

ならねども
(ならずとも)
見せんす

をばすべからず。かけひき自在ならねども、いでさらば最期の軍して、汝等に見せんす。』とて、城中より斬つて出で、思ふ様に戦ひ、年積つて六十二歳、秀頼の足輕大將まひ賀孫市重次に討たれけり。

(新井白石)

二三 古今傳授

慶長五年は二二六〇年、後陽成天皇の御代、上杉景勝、内大臣徳川家康、參らんずらん

慶長五年の秋、奥の上杉謀反の聞えあつて、徳川殿御發向の事あり、細川忠興御跡を慕ひて馳せ下る。この隙を窺ひて、大阪の奉行等兵を起して、徳川殿を失ひまゐらせんと謀る。内府に従ひて奥に下りし大名等が妻子、一に取つて質とせば、彼等みな御方に參らんずらんと

をんな
明智光秀の女

さなはいはせそ

懣なること

具して

て、まづ最初に忠興が妻子を城中に迎へんとす。かの妻をんななれど、さる者の娘なり、又日頃わが夫の心の奥は知りぬ。使者度々に及べども、更にその催促に従はず。さらばさな言はせそ。人々の見懲しのため、搦め取つて參らせよとて、軍兵を差向く。忠興が妻、家人等に防ぎ矢射させ、家に火かけさせて自害す。奉行等案に相違し、懣なること仕出し、諸大名を内府の方人になし果せて詮なしとて、これより後、人質とるべき沙汰に及はず。この上は細川が城攻め落せとて、丹波、但馬の軍勢を差向く。』然るべき兵をば引きすぐり、忠興具して奥へ下りぬ。おとなしき者共に、兵をば少し附けて、豊後の國へ下して、

藤孝入道に年
老いたると幼
き者共と

さる古兵

杵築の城を守らせたれば、丹後には藤孝入道に年老い
たると幼き者共とばかり残り居て、はかしく軍す
べき者多からず。されども入道さる古兵にて、少しも騷

さらぬ小藝



齋 幽 川 細

ぐ氣色もなく、宮津の
城を棄てて田邊の城
に立て籠り、敵おそし
と待ち居たり。
抑、この入道と申すは
弓矢打物執つて堪能
なるのみにあらず、さ
らぬ小藝にだに達せ

敷島の道

絶えなん

大内

ずといふ事なく、天下雙なき多才多能の人なりけり。中
にも敷島の道に深くすきて、古今和歌集の秘訣悉くこ
の人に傳れり。さればこのたびわが身討死したらん後、
この道長く絶えなん事を悲しみ、城に籠れる初、相傳の
書ども取集めて、大内に獻るとて、

古も今もかはらぬ世の中に、

心の種をのこすことのは。

といふ一首の歌をそへてぞ參らせける。

かくて丹波、但馬の軍勢雲霞の如く押寄せ、十重二十重
に取巻きて、火水になれと攻めけれども、入道ちつとも
ひるまず防ぎ戦ふ。かくてはこの城なか／＼一時に攻

べうも見えず
烏丸光廣
毛利輝元、石田三成
…よりこのかた…に至るまで

三條西實條

め落さるべうも見えず。烏丸右大辨勅使として大阪に行き向ひ、輝元、三成等に勅諭を傳へらる。それと和歌はわが國の風として、天地開けそめしよりこのかた、百皇の今に至るまで、その道永く傳れり。然るに今、古の事をも歌の心をも知れる人忽ちに失せなん事、尤も朝家のなげきなり。如何にもしてかの二位法印が恙なからん様を計るべし。と宣られたり。輝元を始として奉行等謹んで承り、急ぎ早馬を立てて寄手の軍兵を止む。もとより入道は今を最期と思ひ切つて戦ひしほどに、寄手たやすう引いて還らん事叶ふべからず。このよし又都に聞えしかば、三條西大納言綸命を含みて、丹後國

普天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣、(詩經)
いはんや…
…蒙るをや

ありなまし

幾ばくぞや

に下向あつて、速に勅に應じてその城を去るべし。とありければ、入道畏りて「普天の下、率土の濱、王土王臣にあらずといふ事なしと承る。いはんやこの微賤の身、かく目のあたり寵渥の辱きを蒙るをや。さりながら入道が年若き時ならんには、弓矢執る身の習なり、敢へて死を白刃の際に決して、深く恩を黄泉の下に感ずる事もありなまし。今は齡既に傾きぬ、たとひこの戦に死することなからんにも、餘命亦幾ばくぞや。されば惜しかるまじき身なるがゆるるに、私の名譽を貪つて、いかで王命には背きまらすべき。」と答へ奉りて、やがて城を立つて、高野山にぞ赴きける。

(新井白石)

兵馬の間に出
入し

二四 古羅馬氣質

ケーヤスマルシヤスは古羅馬の名族の出なり。屢、兵馬の間に出入して、功を樹つること多く、特にコリオリ町がボルシ人に陥れられしを回復して、コリオラナスの稱號を得たり。平民を賤しむは當時の貴族の習にして、コリオラナスは功を恃んで自ら高くし、彼等が漸次權力を得るを見て、心中甚だ快からず。嘗て國事を議するに當りて、侮蔑の辭を放てり。平民深くこれを憤り、迫りてその會に出でて陳謝せしむ。
コリオラナス昂然として曰く、余功ありて罪なし、何ぞ

(九六)

故國

もし用ひば

もし…欲せば

長驅

節を屈して平民の前に立たんや。」とて袂を拂つて羅馬を去る。「忘恩の奴輩、汝等が後悔は遠からず。」と罵りて、その敵ボルシ王タリヤスの城に行き、王に謁して曰く「吾の名はケーヤスマルシヤス、稱號はコリオラナス、わが戦功の記念は今この稱號あるのみ。故國を放たれ、來つて王の軍に投ず、王もし用ひば努力せん、もし舊怨を報ぜんと欲せば、吾を撃て。」
タリヤス喜んでこれを用ひ、兵に將として羅馬を討たしめたるに、連戦連勝、長驅して城門に迫れり。城内騷擾して爲す所を知らず、評議を重ね、使節を選びて和を請はしむ。コリオラナスこれに對へて、余はボルシの將な

手を束ねて

り、ボルシの爲に謀らざるべからず。』とて、誅求甚だ峻酷なり。使者これに應ずる能はず、手を束ねて歸れり。赫々

旦夕の間



く聽を訴愁の母スナラガリコ

たる大都の名譽も泥土に委し、羅馬の運命は旦夕の間にある。城中には窮迫の餘一計を案じ、コリオラナスの母ボリユニヤを使とし、その妻子をし

斥(退)

てこれに従はしむ。コリオラナス更に使節の來るを望み、直に逐ひ還さんとしたりしが、近づくに隨ひて見れば、わが母なり。恩愛の情いつとてか變るべき、急がはしく出迎へて、これに縋りつかんとす。母斥けて曰く、御身はケーヤスマルシヤスにして、吾はその母なるか、抑も御身は敵將にして、吾等はその降人なるか、まづこれに答へよ。』コリオラナス黙して物いはず。母は言を繼いでいふ、『謀叛人の母よ、國を滅す大逆無道の武士のうみの母よ。』と罵らるゝものはこの母ぞや、この母ばかりが責めらるゝぞや。わが身だに子を生まざば、わが國は今も榮えなん。されどわが身は老いぬ、いつまでか苦しむべ

母ぞや。
責めらるゝぞや。

奴隸にすと

腸を断ち

き、唯御身の妻と幼き兒との上を思へ。御身はその國を
奴隸にし、併せてその妻子を奴隸にすとは知らずや。
流石に猛き大將も、母の言に氣挫け、涙に咽ぶ妻子の歎
にも腸を断ちて、獨り慚然として俯き居たりしが、やう
やくに心や決しけん。母上、御身は羅馬を救ひたまへり、
されど御身の子を失ひたまへり。とて、兵を引いて還り
ぬ。かくて程なくコリオラナスは群衆に殺されたりと
いふ。

二五 山岡鐵太郎

明治維新の際、前將軍慶喜は上野寛永寺に退居して、専

軋轢

疏通

心恭順の意を表すれども、幕臣のこれに従はざるもの
多く、軋轢紛擾抑へ難く、人心恟々たり。慶喜日夜焦慮す
れども施すに術なく、意志を疏通せんとするにその人
なく、關東の野空しく大亂の起るに任せざるべからざ
るかを歎ず。その臣高橋伊勢守申す、麾下の士多しとい
へども、この任に當るもの、義弟山岡鐵太郎あるのみ。然
れども公果して小祿の士を重用し給ふかと。慶喜乃ち
鐵太郎を召す。

慇懃

微衷(哀、衰)

鐵太郎召に應じて至れり。慶喜慇懃に命じて曰く、わが
意は只管天下の太平を計るにあり。微衷未だ通せずし
てまづ賊名を蒙る、無念この上なし。汝速に官軍に到り、

貫徹
さることなが
ら
彌縫

百方力を盡して、わが意を貫徹せしめよ。」とて、涙言と共に下る。鐵太郎輒く應ぜず、仰はさることながら、或は他に御企ありて、一時を彌縫せんとし給ふにあらずや。」と押し問ふ。慶喜曰く、吾に異志なし、誓つて勅命に背かず。」



山岡鐵太郎

「然らば微臣引受け、必ず御意を徹底せしむべし。臣が眼の黒きうちは、斷じて御憂慮あるべからず。」と對へて、辭して出でたり。

眼の黒きうち

大喝一聲
何をか躊躇す

臨機應變

鐵太郎は幕臣小野氏の子、出でて山岡氏を襲げり。劍を學び禪を修して、意氣精悍、衆鬼鐵と綽名してこれを忌憚す。今や絶大の任を受け、二三の重臣に謀れども應ずるものなし。乃ち軍事總裁勝安房守を訪ふ。安房守も直にこれを引見せず。鐵太郎強ひて面會を求めて、己が任務を告ぐ。安房守未だその人と爲りを知らずして、遲疑の色あり。鐵太郎大喝一聲して曰く、事今日に至つて何をか躊躇する。安房守曰く、然らば問ふ、この際幕府の取るべき方針は如何。曰く、また朝幕の別なし、たゞ舉國一致あるのみ。安房守豁然悟る所あり、更に官軍の陣營に入る手段を問ふ。曰く、臨機應變、策はおのづから胸中に

手書を裁し

湧くべし。安房守その確乎不動の精神に感じ、手書を裁し、携へて官軍の本營に至らしむ。

時に官軍の先鋒は既に江戸に近づいて、六郷川の彼方にあり。鐵太郎その前に進みて、大音に「朝敵徳川慶喜家來山岡鐵太郎、大總督府へ通る。」と名のる。前後の銃隊辟易して、敢へて近づく者なし。それより西に向ひて晝夜兼行し、やがて静岡に著して大總督府に入り、參謀西郷吉之助に面謁せり。

鐵太郎徐ろに問うて曰く、この度の御東征は是非を論ぜず進撃する御趣意なるか。吉之助答へて曰く、誰か好んで人を殺し、國を騒がさん、唯己むを得ざればなり。曰

辟易

誰か……騒がさん

何の要あつてか發向する

宮は有栖川宮熾仁親王

く、わが主既に謹慎して罪を待ち、生死共に朝廷の御沙汰に従はんとするに、大軍何の要あつてか發向する。曰く、されど幕兵の反抗するもの多く、既に甲州には戦端を開けりとさへいふにあらずや。曰く、賊徒の所爲はわが主の關する所にあらず。公正無二の志貫徹せずして、空しく脱走の輩と混視せられんこと、慶喜が終生の憾なり。これを訴へんが爲に鐵太郎をして推參せしむ。願はくは旨を大總督宮殿下に傳へたまへ。吉之助容易に肯んぜず、鐵太郎毅然として曰く、愚衷察せられずんば、只一死あるのみ、麾下八萬命を棄つるものまた一人にあらず。抑、天子は民の父母なり。理を明かにして不逞の

討ずるをこそ
王師とは申せ

肺腑を衝く

預くる(預る)

徒を討ずるをこそ王師とは申せ、謹慎恭順、一意朝命を待つものに對しても、御宥免なくば、わが國家を如何せん」と、至誠の情、人の肺腑を衝く。
こゝに於て吉之助は宮に伺候し、御書を賜はりてこれを鐵太郎に傳ふ。書中五箇條の命令あり。鐵太郎一々拜承したれども、唯末條、慶喜を備前に預くる事とあるに至り、この一箇條は斷じて御請なり難しと對ふ。吉之助曰く、「朝命なり。鐵太郎曰て、たとひ朝命なりとも承服し難し。吉之助曰ふこと前に同じ。鐵太郎押返して、しからば假にかれこれ位置を易へて見よ。もし貴藩に罪あらん時、足下はその主を差出し、安閑として傍觀するを以

(續)

干戈

維新史の末頁
は……終れり

とだにいへば

力づく

て、君臣の義となすか。余に於てはこの條決して忍ぶ能はず。」とて、辭色頗る厲し。吉之助默然として沈思し、良久しうして曰く、「諾、徳川殿の事は吉之助引受けたり。」かくて鐵太郎は東歸して、談判も調ひ、府下百萬の生靈、今しも干戈の下に叫喚せんかと見えしもの、事なくして止み、維新史の末頁は不祥の大禍を見ずして終れり。

二六 日蓮上人

世に英雄豪傑とだにいへば、軍人、政治家などに限る如く思ふものあれど、こは甚だ誤れり。軍人、政治家の事業は、表面は如何にも派手なれども、唯力づくにて敵を亡

するに過ぎず

當時こそ……
驚かせども

人類

眇たる

數ふるに違なき

し、國を取り、或は時運に乗じて政權を掌握するに過ぎず、謂はば間口のみ廣くして、奥行の淺き生活なり。さればその事業は、その當時こそ天下の耳目を驚かせども、後世に傳りて、永く人類を支配すること能はず。この點に於て、宗教家の仕事は世に竝なく大いなるものなり。釋迦、基督、孔子等は、その當時にては眇たる一個人に過ぎざりしが、その勢力は數千年後の今日に隆々として盛なるに非ずや。印度、羅馬は既に亡び、支那歷代の變遷數ふるに違なき程なれども、佛教、基督教、儒教は依然として人心を支配せり。

日蓮上人は、日本宗教家の中にて、第一等の人物なり。嘗

溢美

一として通ぜざることなく

極致

喝破

に宗教家として第一等の人物なるのみならず、單に一個人として見ても、その人物の偉大なること古今殆どその比を見ずと謂ふも、溢美にあらざるべし。安房の漁師の家に生まれながら、少き時より宗教改革の大願を起し、京都、奈良、及び關東の諸國に歴遊して、佛法はいふに及ばず、神道、儒學一として通ぜざることなく、殆ど天下の知識を學び得たる後、茲に法華經を以て佛教の極致と證悟し、當時流行せる諸宗派を攻撃して、法華宗の一派を開けり。素より天下に一人の御方もなく、四面悉く法敵なる中に、この新宗派を宣傳して、大膽にも眞言亡國、律國賊、念佛無間、禪天魔と喝破せり。しかもこの新

迫害

宗派を唱へたるは、念佛者、禪宗信者等の充滿せる鎌倉の眞中にてありしかば、執權北條氏を始として、諸宗の僧侶はいふまでもなく、鎌倉中の信徒皆舉りてこれを迫害せり。日蓮いさゝか臆し恐るゝことなく、法華經の爲に命を捨つるは、砂に黄金を代ふるが如しとて、益その教を弘めたり。

逐はるゝ

夜襲せられ

焼かれ

召し上げられ

彼はこの爲に住所を逐はるゝこと二十餘度、或は暴民に夜襲せられて庵室を焼かれ、或は法敵に要撃せられて眉間を割かれ、或は弟子を殺され、或は檀越の所領を召し上げられ、或は伊豆のはてに流され、佐渡の島に追ひやられ、或は龍口にて首斬られんとし、打撲刀創身に

ならず見ゆ

絶ゆることなし。かくの如き迫害に遇ふこと前後實に二十年、されど風大なれば波亦いよく、大なるが如く、少しもその當初の志を枉げず、身命を塵芥の如く輕んじ、偏に法華經の眞理を弘通して、天下を救はんとせり。その事蹟を思ひやれば、心も言葉もなかゝに及ばず、實に人間業ならず見ゆ。法華の宗旨如何は措き、その宗祖たる日蓮の人物は實に千代萬世の龜鑑たり。

(高山林次郎)

二七 田舎と偉人

謂ふ……と
生まるゝコト
あらず

世人常に謂ふ、英雄豪傑の士は必ずや隴畝の間より崛起し、曾て都會に生まるゝあらずと。固より篤論にあら

ずと雖も、蓋し一世を動かす英雄豪傑は多く村落邑里より出づるが如し。即ち豊臣秀吉の中村より出でたるが如き、ビスマルクのフリードリッヒスルより出でたるが如き、その他擧げ來れば、苟くも名を當代に擅にし、譽を後昆に垂れたる學者、事業家、詩人、義士の、身を村閭茅屋の下より起して、遂に天下に雄飛するに至りし者極めて多し。これ都會に生まれ、都會に長じ、都會に老い、畢世齷齪として都門の中に生活するは、猶畢生一家中に屏息すると同じく、天地狹隘、宇宙窄小、更に活潑、清澄、宏大、雄壯なる心氣の伸ぶるなければなり。それ身都門の中に生活し、而して身體を強固にし、精神

これ……なけ
ればなり
齷齪
屏息
伸ぶるコトな
ければ

郷里の地や

歸るや

ならざるにあ
らず

を旺盛ならしめんには、時に郊外に散策して自然の壯觀を眺め、以てその身神を養ふに在り。郷里の地や、都門を距ること或は二十里、三十里なるもあらん、或は百里、二百里に上るもあらん。然れども舟車の便を假らば、均しく比隣の如きのみ。故に往くに鐵路若しくは船舶に依り、而して歸るや亦これに依らば、日曜日天朗かなる時、近郊に遊ぶと何の異なる所かあらん。抑、都門の紛々囂々たるは、人生の爲に必要なならざるにあらずと雖も、一層大なる志氣を涵養せんには、都門を離るゝこと遠く、山高く、水長く、萬境自然なる處に於て、清淨なる空氣を呼吸せざるべからず。血氣未だ定まら

際してや。

逍遙

醫するコト

ず、身神猶堅固ならざる時に際してや、その學業の暇幸に故山に歸るが如き機會あらば、道途を迂廻して、名山大川の間を逍遙し、時には孤枕を山驛の夢に欹てて、遠く猿兒の叫ぶを聞き、時には山徑欹危、細棧纒に通ずる所、岩もる水を掬して以て渴を醫する、これ洵に務めて試むべし。

(三宅雄二郎)

二八 都人の手紙

お啓然れば、市の上天気晴居して喜ぶお胸の
事とて遊言を語りた動きも、一昨も持ちゆり作

り 經ざるモノあ

鳥 鴉

何ぞ相似たる
コトの甚だし
き。

寫真機械のまだ一着もよも経ざるありて、貴
方とてあだたこし難く、或は途上好圖標と信
るありとて遠く思ひ立ちて早稲田まで
と志し、作を午後一時頃に着て、
鶴巻町より田圃に出づれば、直に一面の榛の木
林にして、其のあなただに木隠れて、獨り畑あつ男
居たり、其の少きが鏡橋と名め、日下駐掛して
贈物もよも追ひ知し、作も此邊にきて、
持の村田鏡の多様と、今日も多様カメラの
伎倆とは何ぞお似たるの甚だしきと、心
私かに可笑しく存じ作

friend friend

懸り候が甚だ面白く

寫さんものと

此烟お煙草の成るべし字をいふ如何やと
 思ひやり田を横ぎりて園の堤に出でんと
 畦道づつといたるや隙地の空に一掃の嫩
 やありて痛げに照りぬが甚だ面白くそえぬ
 故處のまた遠樹の昔のぬくなるも流石と
 しては青雲と空をえぬも或は照した枝に或は
 赤たたに或はさく低く短うた位高の工夫
 ひしまに激風起りてやなほづまか油え先を
 中作かゝる例は予が鏡籠に於ても廣く遠く
 せし折に流るる
 去つて野の橋を渡るぬふ途に二小兒の姿を

かいさぐり候が嬉しきに

眠れるが如きが現れ

流むた遇ひは若くまらぬりや交はれ持て
 る子れ方と逢ふまたぬ底をわいてどり作が
 嬉しきたるを散らす一照し再び彼橋の本
 林の方を望みぬば前のやうに空しくはぬ
 そゆぐ又暖やの緩く横うりて眠きるが
 ぬきが現れぬるもあつく寫し取り作
 なぬ此雲彼や又歩き廻りうち疲れてまた
 物にばあ内出拂ひて流た越きたるが先嬉
 しきは極上の鐵瓶沸くとして煮えたり早
 未茶をといれんと獨りひしめかす折から山代
 の友とて干柿と贈り来たるに會ひまた色と

折き其一枝を喰して濃緑の熱茶に啜ぐ快
謂ふべからず作撮影の結果は正なる像に
つづく作草

(紅葉書翰抄による)

二九 農夫の歌

朝のふるゝびこゝまあり、
朝のわれらとともにあり、
うもれよ眠ゆけよ夢、
隠れよさらば小夜嵐。
もろ羽うちふる鶏の、

うもれよ
ゆけよ

よそほひせよ

いでよ

ゆへ
とれ

のんどの笛を吹きあらし、
けふの命のたゝひの
よそほひせよと叫ぶかな。

野よいでよ、野よいでよ、
稲の穂の黄よみのりより、
草鞋とくゆへ、鎌もとれ、
風よ嘶く馬もやれ。

血しほの草よ流さねど、
鋤鉞ふりて、いりづちに、

天の嵐にたゞりひし
わぶたゞりひの跡やこゝ。

見よ

見よ、日の高き青空の

はてよりはてを弓として、

今し。

今し父の矢、母の矢の

光をふらす眞晝中。

共よ來て蒔き、來て植ゑし、

田のものに秋の風おちて、

野邊の琥珀をならすかな、

刈りほせ

刈りほせ、刈りほせ、稻の穂を

(藤村詩集による)

三〇 農業は健康を養ふ

農は健康に適する職業にして、農民は最も健康なりとは、古今各國の等しく認むる事實なり。ワシントンが「農は、人民が職業の中、最も健康に適ひ、最も貴重にして、最も有益なるものなり。」と云へるは、古來人口に膾炙する所、又ゲーテの言に、「黄金をも魔術をも薬餌をも要せずして長生する道は、田舎に退隱して、希望を小にし、交際に遠ざかり、澹泊なる食を取るにあり。約言すれば禽獸の如く生き、形骸を土木にし、親ら田圃に培ひ、肥料を施

澹泊

迎ふとも

嬰鏢

適すとせば

涉獵

この問題たる

すを厭惡せざるにあり。斯くなさば、八十の高齡を迎ふとも、尙嬰鏢たるを得べし。とあり。余はこれ等の古人の言に徴し、その他實際の事實に鑑みて、農業は果して身體の健康に適するものなるか、若し適すとせば、その程度幾何なるべきかを研究せんと欲し、數多の冊子を涉獵し、若しくは統計に索ねて、聊か得る所ありたり。

この問題たる、もと一場の空論にあらずして、最大なる活問題なり。わが國は元來農業を以て國本となし、國民の四分の三は農を恒業となす。かくの如く農家の多き、一國の衛生に如何なる影響を及ぼすか、國民の氣象に如何なる影響を及ぼすかを講究するは、實際に必要な

瞭然

證據

る問題なりとす。我邦の徵兵に關する精密の統計は、各府縣に備りて、若しこれを一覽せば、徵兵合格者が田舎に多くして、都會に少きは、直に瞭然たるべけれども、但該統計が世に公にせられずして、余輩の自由に閱覽する能はざるは、甚だ遺憾とする所なり。

然れども農民の體格が他業者に優ることは、敢へて統計的證據を擧ぐるを要せず、統計なき時代に於ても亦既にこの事を認めたるもの少からず。熊澤蕃山の大學或問に、農兵とならば、本邦の武勇格別強く、眞の武國の名に叶ふべし。士農別れてよりこのかた、身病み、手足弱くなりぬ。心ばかりは勇むとも、敵にもあはで疲るべく、

病死もすべし。といへり。これを以ても、農は健康を助くる職業なるを知るべし。

能波

(新渡戸稻造)

新體國語教本 卷六終

新體

明治四十一年九月廿八日 印刷
明治四十一年十月二日 發行
明治四十一年十二月十日 訂正再版印刷
明治四十一年十二月十五日 訂正再版發行

新體國語教本
每卷賣價 金貳拾五錢

新體

藤岡作太郎

東京市小石川區小日向水道町七十三番地

西野虎吉

東京市京橋區築地三丁目十一番地

野村宗十郎

東京市小石川區小日向水道町七十三番地

関成館

【振替貯金口座】東京第五零貳番

東京市日本橋區數寄屋町九番地

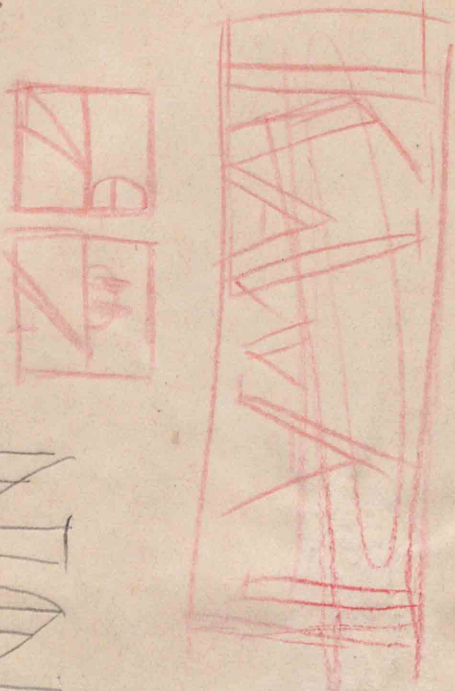
林平次郎

大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角

三木佐助



著者 發行所 印刷者 發行所 販賣所 販賣所



JUNIOR

NONIAMI

Handwritten cursive letters: a, i, g, l, e, v, b, a, i, g, l, e, v, b

見

新刊

國語教科叢書

文學博士 藤岡作太郎著 體新國語教本	文學博士 金澤庄三郎著 日本文法教本	文學博士 金澤庄三郎著 日本文法教本別記	文學士 新村出編 普通國語綴字法	文學士 新村出編 普通日本文法	文學博士 大槻文彦著 新日本文法教科書	文學博士 藤岡作太郎著 新日本文學史教科書	開成館編 日高秩父書 明治習字帖
全十册	全四册	全一册	全一册	全一册	全四册	全一册	全三册
各册金貳拾五錢	各册金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	各册金貳拾五錢	首卷金貳拾錢 上下續卷 各册金貳拾五錢	定價金四拾五錢	各册金拾八錢

